

前田雅之著『記憶の帝国』

——『終わった時代』の古典論——

竹村信治

本書構成は以下の通りである。

まえがき

## I 古典と倫理

1 古典を読むことと倫理

2 古典・倫理・へ日本へ

## II 古典と権力

1 院政期の政治神学

2 正統的権力が生み出す余剰物——天皇を囲繞する御持僧と后

3 憧憬と肯定の迫り——『古今著聞集』における京と後醍醐院政

## III 古典と言説

1 記憶の帝国

2 〈事実として〉とリアリティーの間

3 憶ミ咲フ光景

4 「ひとり」という形式

## IV 古典と信仰

1 慶滋保胤と勸学会——信仰が一線を越える時

2 讃岐典侍——不信心を支えるもの

3 『今昔物語集』——法悦なき信仰  
初出一覧 あとがき 索引

\*

前田氏との出会いは二十年以上も前のことになる。そのころ、氏の同窓の會田実氏から、「学部の頃、図書館に行けば前田に会えた」と聞いた。その図書館通いの日々を読まれた書籍の具体は知らないが、氏のいま一人の盟友仲井克巳氏の証言によれば、「前田雅之は、日本はアジアの弧状列島でありアジアの文化は一體化して論じられるべきであるという認識を、遅くとも十代の後半（一九七〇年代）にはもっていた。そして、二十歳を過ぎた頃には、百年以上も前にイギリス隊が一度通っただけというインドの集落を数か月にわたって放浪し、シルクロードの起点にあたるインドの宗教や思想の始原まで自らの足によって廻行しようと試みた。」（小峯和明編『今昔物語集を学ぶ人のために』V「享受・研究・創作」7「戦後期（一九五〇年代以降）」二八二頁）ということだから、それは広範な領域にわたるものであっただろう。本書は、そうした氏の今日にいたるまでの広汎かつ歴大な読書を背景に、それらの「諸語」＋「了知」（二四三―二四六頁）をもって語られた『古典論』、すなわち、『古典（もしくは歴史、日本）との向き合い方』、『古典（もしくは歴史、日本）像をめぐる議論に参入するなかで氏のうちに発現した「覚悟」（『著積された知とその運用』、一四三頁）の一端が、挑発的に開示されたものである。

前田氏の著述の魅力にはいくつもの理由をかぞえることができ

ようが、この、背景にある「広汎かつ膨大な読書」「誦誦」+「了知」「覚悟」(＝「蓄積された知とその運用」)は、その主要なものの一つにちがいない。このことは氏の論考に親しむ者のひとしく認めるところであろう。論述部分もさることながら、特に(注)にそれは顕著であり、論考の主題を逸脱する場合も少ない各項注記内容は氏の領有する知の沃野をよく伝える。とともに、エクリチュールの間の知的営為の動態をよく窺わせている。

知の過去と現在を領域横断的に把握し、これらに周到な吟味と鋭利な批評を加え、それらを当面の課題に適用しさらに次なる課題を展望する一方、随時の想起をも書き込むことで問題領域を拡大させていく言述。それは、氏の談論風景を髣髴させるものでもあつて、そうした氏の肉声のひびく論述が、つねに読む者にその現在を確かめさせ、新たな視界を開き、知的刺激を与え、発見を導くのであつてみれば、人がそこに引き寄せられていくのはけだし当然であろう。「古典(歴史・日本)論」を主題とした本書ではその声が一際大きく響いているようだ。

前田氏著述の魅力の理由には、氏の世界観、感覚、研究関心といったことも指摘されなければならない。仲井氏の先の一文——前田氏前著「今昔物語集の世界構想」の研究史的位置に関する秀逸の評——には、「前田が早くから親しんだ志賀直哉の七十七歳における「自分も含めてすべての存在は」大河の水の一滴に過ぎない。それで差し支えないのだ」という感慨に近い「世界認識、これに由来する「作品に過剰な期待を抱くことなく「ある」ものを「ある」とし「ない」ものを「ない」と認定する前田の醒めた感

覚」、「院政期というたぎった時代における歴史認識・世界認識・政治・宗教などが複合的に絡み合うエピソード(時代の基底を形成している全体的な知のありよう)」とその中でテキスト(「今昔物語集」)の言述の「拡散し続ける」あり様に寄せる関心などが取り立てられている。それらは、氏の論述が多くの場合「アイロニー」(「宿命」)の別袂にむかうこともかわつてはいるはずで(一三頁)、「アイロニー」をこそ生きている我々は、氏の世界観、感覚、関心をもつて別袂され再構成されるそれと出会い、共感し、著述に引き込まれるという次第なのだ。

さて、こうした前田氏著述の魅力にくわえ、本書にかかわつて、一等強調しておきたいのは、その倫理的な構えである。氏が本書で提唱する「倫理」とは、古典研究および古典研究者が「日本」とは何か、「日本」の文学とは何かへの根源的な問いと構え」を意識化し、「古典テキストに内在する、他者であり、非在しないしは遍在する前近代の(日本)を考えること」で、「歴史」の発見、「国文学」を生み出した近代、古典を無価値にした近代やそれに乗った自己」そして「われわれを作り上げた近代、われわれが生きる現代、さらに、われわれ自身」の「相対化」に向かうことである(四七、一八・九頁)。古典教育の意義もこの「倫理」観にそくして提示され(二三七頁、ともに「古典が流通した時代の文脈に返してテキストを読むこと」(二五頁)「古典テキストそれぞれ固有の論理を生徒に理解させること」(二三七頁)の重要さが指摘される。かかる「倫理」論は、大局で共感できるものの、田中実氏所説(五、一九、三八、四六・七頁)に理解が届か

ず、マックス・ヴェーバーの病んだ「近代の病」(三七・八、四〇、五一頁)をこそ今しばらく病んでいたい評者には多少の違和をおぼえるもので、特に「古典・古典研究」と「日本」との切り結びについては(五四頁注38や本書の論述からしてそれは多分にアイロニカルなものようだが)、氏の思索の糧となつたという錦仁氏との議論(五四頁)などをもうすこし聞いてみたいところである。

したがって、氏の「倫理」論そのものへの判断は留保するほかないのだが、「古典・古典研究」と「倫理」問題を接合していく問題構制には全面的な賛意を表したい。こうした問題構制は、発話者が自ら発話の立ち位置(「いま・こゝ・わたし」)をつねに審問しつづけるところからしか生まれてこない。氏の論考にはいつも冒頭に長大な課題(「問題領域・問題構制」)設定の論述があり、それを特徴とするが、本書各論にもそれは見られる。さらにいえば、I「古典と倫理」を巻頭に排して以下のII「古典と権力」、III「古典と言説」、IV「古典と信仰」の各部に具体的な「古典(歴史、日本)論」を展開する本書の全体そのものがそうした結構をもっているともいえそうだが、これもこの審問の構えにかかわっている。何が問題なのか、それを自らの現在(「いま・こゝ・わたし」)を審問しつづけること、その問いを「わたしたち」の問いとして共有すべく読者に投げかけること、そして問いへの自らの応答を読者に呼びかけ読者の応答をうながすこと。氏の著述にはいつもこの問いかけ、呼びかけが備わっている。先に「倫理的な構え」といったのはこのことだが、この持続的な審問の倫理的な構えこそが、一方では、氏を「広汎かつ膨大な読書」に駆

り立て、「諸誦」+「了知」をもつてする「覚悟」(「著積された知とその運用」)をとしたアイロニーの別扱へと導くのであろう。その意味で、「古典・古典研究」と「倫理」問題を接合した問題構制は氏の「倫理的な構え」の必然としてあり、本書はこれを全面的に展開させたものと評せよう。

この「倫理的な構え」は先の(へ注)のあり様をもよく説明するが、さらに、それは発掘、設定された問題領域・問題構制のもとの個別的、具体的な論述過程においても認められる。周到な事例解説、用例提示のもとの丁寧な分析、綿密な思索、そしてその記述。これらのすべては読者との協働的な対話に向けて用意されているごとくである。こうした論述の構えは、時に、「日本における政治神学の代表と言える仏法王法相依論」が「仏教王国と言われた院政期においても、全体制に君臨するイデオロギー」政治神学たりえなかつた(八一頁)との結論をつうじて(日本)論における「政治神学」のあり方やこの問題構制の有効性の如何の吟味へと読者を向かわせたり(II「院政期の政治神学」、論旨にかかわる「失われた文脈は抜書する人間のみならず読み手の記憶によつて補うことも不断に行なわれたはず」に添えられた「剥き出しの言説として今度は抜書する人間の文脈の中に置換されることも意味するだろう」(二四七頁)との言及が、現今のハイパー・テクスト論(山内裕之氏インターネット講座「メディア・情報・身体——メディア論の射程——」第12回、参照)を想起させて、これと中世注釈世界との相同性に関する議論や、そこで出来している「記憶」の変質ひいては「記憶の帝国」の崩壊問題を惹起したり(III

1「記憶の帝国」、『源氏物語提要』の梗概化に参与した「世間常識」を丁寧に読み取りつつ指摘される「古典享受を支える」記憶の帝国」を基底に置きながら、書承的な注釈の継承を行なう一方で、…(中略)…注釈に基づいた物語言語の様々な要素を記憶——連想システムで取り込みながら、一応因果関係で繋いでいき、遂には、原典を超越する、といったダイナミズムに溢れた動的な場(一六七頁)が現代の「読み」の場の営為を振り返らせ、これとの共通項を発見させ、近代の「梗概」概念そのものを逆に見直させることもなろう(Ⅲ-1、因みに「提要」の梗概化はテキストと言表の(巻序を越えた話題単位の)関係づけが基本で「世間の常識」は二次的なものだろう。光源氏参内時の祖母同道は「朝負命婦更衣里邸訪問」場面で伝えられる帝の言葉と、弘徽殿の光源氏養育は「朝負命婦更衣里邸訪問」直前記事と「読書始」時記事と、それぞれかわるか。そのほか、揚げ足取りめくが、たとえば「袋草紙」上巻の「あとなきこと」とこそみれ」の上句を資仲が自己の囊指である実頼の歌を想起して明かした」話題が例示された際、これに「その割には、実頼の下句「あとなきこと」にあとのなきかな」は、造紙の表紙にある「あとなきこと」とこそみれ」と異なっているが(一四二頁)といった眩きが書き込まれていることで、造紙表紙の下句「あとなきこと」とこそみれ」が「この趣向を実頼逸事の跡を襲うものと思ひ出せ」(実頼が「あとのなきかな」と詠んだことへ)「あとなきこと」の跡と見る)の意であるかとの読みを

誘発されるといったこともあり、これらを含めて本書はその「倫理的な構え」をもった論述をとおして読者との協働的な対話の場面を用意し、さまざまな問題構制を提示しながら挑発的な問題圏を切り開き、われわれにそこでの読みと思索をうながしていくのである。

協働的な対話の媒体としての「古典(歴史・日本)論」。これは「古典(歴史・日本)論」の著述のあらたな形を提示するものでもあり、その意味でも本書の意義は大きい。なぜなら、われわれにとって今必要なのは高踏的、教養主義的な、あるいは自閉的自足的なアイデンティティに呼びかけるイデオロギッシュな「古典(歴史・日本)論」ではなく、「古典(歴史・日本)」をめぐって問いを発し、これに応答し、それを通じて問うべき問いを発掘し、問い方を鍛えていく、そうした営みの媒体となる「古典(歴史・日本)論」だからである。もちろん、こうした媒体提供が何を産み出すかは、媒体自体の問いかけと呼びかけの質に多く依存することだろう。本書は前田氏領有の知の沃土、エクリチュールの間の知的営為の躍動をもってこれに見事に応えている。

新たな「古典(歴史・日本)論」の登場、古典研究のあらたな視界の開かれを、ともに喜びたい。

(二〇〇四年二月 右文書院 A5判 三二六頁・索引一九頁 税込三九〇円)